

一方、一六歳以上の仏教徒で出生地が長崎の者は三人。年齢も一七、一八、二三歳という若者である。佛教徒残り一〇一人は長崎以外の出身者であった。

つまり、寛永一九年の平戸町は、①一五歳以下の長崎出身佛教徒の少年少女で②十六歳以上の佛教徒で出生地が長崎の者③長崎以外の出身者である佛教徒の住民、④一六歳以上でキリシタンであつた経歴をもつ長崎出身住民に四分される構成であつたことがわかる。

転宗者と佛教徒が家族の中に混在している状況であった。

に平戸で死亡した。石本家下女きく(三〇)は大村郡村で生まれ、幼少時からキリシタンであつた。九歳で平戸町へ奉公に来て奉行竹中重義の代に棄教し法華宗本蓮寺に帰依。父は大村で存命。はつ(二二)はきくの娘。誕生時から法華宗本蓮寺が旦那寺。庭子で父はわからなさい。

石本家は初期長崎住民の第一世代の新兵衛と女房、大村出身の下女が転びキリシタン。一方、下女きくの子はつは、誕生時すでに母親も棄教した禁教期であったためにキリシタンの経歴はない。下男と下女の間に生まれた子を庭子と云う。後述のいせ(四)という娘も庭子と記載されている。

川崎屋助右衛門尉家

川崎屋助右衛門尉(六〇)は、高麗生まれ。二歳で備前岡山に連れて来られ、慶長十九年(二六一四)長崎上町に来てキリシタンになった。竹中重義の代に棄教し一向宗に帰依した。同女房(五三)は高麗生まれ、二〇歳で肥後八代、二三歳でマカオに売買され解

娘たつ（一九）猪の介（二六）とも生まれた時から長崎に来た。マカオで受洗し奉行竹中重義の代に棄教した。

娘たつ（一九）猪の介（二六）とも生まれた時から長崎に来た。マカオで受洗し奉行竹中重義の代に棄教した。憶も薄かつたであろう。

助右衛門尉と女房ともに高麗出身者で転びキリシタンであつたことから、町内での監視や請状の提出が命じられていた。

池本小四郎家

池本小四郎（一四）は、平戸町で生まれ、キリシタンの経歷はない。母は転びキリシタンであつたが、幼少時に死別している。

父は高麗生まれの者で、幼少時に長崎に来てキリシタンになり、マカオへ渡つた。慶長二年（一五九七）長崎へ帰り、奉行竹中重義の代に棄教した。長崎で南蛮人の子を養つたことを咎められて、寛永三年（一六三六）マカオへ追放された。両親がいなため、小四郎が当主となり祖母が母として小四郎と弟清八（九）、清五郎（三二）を育てたようである。

祖母、天草出身の下人助右衛門尉（五五）大村出

身の吉兵衛（三〇）下女うは（六四）はともに転びの経歴があり、肥前鹿島出身の下女かめ（三〇）と庭子の娘いせは仏教徒である。ポルトガル人との関り、マカオへ追放された父など、禁教や鎖国によって混乱した長崎を象徴する家族歴であった。

第四回長崎学公開講座
第二部発表要旨

隱元禪師に贈られた 国師号・大師号

原田 博二

國師号は、國家の師表とされる僧侶に贈られる尊称である。わが国で最初の國師号は、臨濟宗東福寺の開山円爾弁円で、応長元年（一二三二）花園天皇より聖二国師が贈られた。なお、在世中に贈られる場合は特賜、示寂後の場合は謚号といつた。

大師（だいし）は、偉なる師、大導師という意味ではじめは枳迦大師の尊称であつたが、後に達磨大師や善導大師など高僧に対しても尊称するようになつた。

わが国で最初の大師号は、貞觀八年（八六六）の天台宗の最澄と円仁では、清和天皇より伝教大師、慈覚大師を贈られた。ちなみに真言宗の空海は、三番目、延喜二年（九〇二）醍醐天皇より弘法大師を贈られている。

隱元は、寛文二三年（一六七三）四月三日に示寂し

第四回長崎学公開講座
第二部発表要旨

隱元禪師に贈られた
国師号・大師号

原田 博二

たが、その一日前、四月二日に後水尾法皇より大光普照国師を贈られた。

これは以後、例となり、

享保七年（一七二二）靈元

上皇より仏慈廣鑑國師、

明和九年（一七七二）後桜

町上皇より徑山首出國師、

文政五年（一八二二）光普

長崎くんち研究(1) 傘鉢の庭先まわり

大田由紀



昭和天皇より贈られた
華光大師号

（一七二二）靈元
上皇より徑山首出國師、
文政五年（一八二二）光普
格上皇より覺性円明國師
と、五十年の遠忌毎に國師
号を贈られた。

そして、二百年の遠忌は
明治五年（一八七二）である
が、維新後のまだ混沌の時
代でもあつたのか、明治天皇よりの沙汰
はなかつた。

しかし、大正六年（一九
一七）大正天皇より真空大
師を贈られ、さらに、示寂
後三百年の昭和四十七年
（一九七二）昭和天皇より
華光大師を贈られた。

ということは、令和四年
（二〇二二）は隠元の三百
五十年の遠忌である。今上
天皇がどういう大師号を贈
られるか、今から興味深いと
ころである。

（一七二二）は、本場所を
済ませたあと、各踊町は
出し物を企業や個人の
家々に呈上する庭先まわ
りを行つた。昭和初期ま
では、踊町区域外にも呈
上を行つていた。

明治三年（一八八〇）の
『榎津町傘鉢庭先簿（高
見家文書）』（長崎歴史文
化博物館収蔵）によると、
傘鉢の呈上はおよそ六四〇
件である。この頃くんち
は前日と後日のみ、中日は
二日間での数である。傘鉢持ちは相
当な体力と技量の持ち主
が揃つていたのであろう。

当時はくんち期間中、
ほとんどの町で町事務所

傘上リキラズ」という書き

込みがあり、こちらはあ

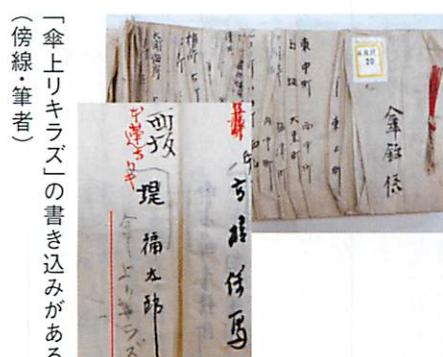
きらめざるをえなかつた
ようである。

また「西坂本蓮寺ワキ
傘上リキラズ」という書き

込みがあり、こちらはあ

きらめざるをえなかつた
ようである。

傘鉢の庭先まわりは踊
町の簡略化のために、昭和
三九年（一九六四）を最後
に廃止された。交通量や
張り巡らされた電線など、傘鉢の移動には不向
きな社会状況になつたこ
とも要因であろう。



「傘上リキラズ」の書き込みがある
(傍線・筆者)

（一九〇二二）は隠元の三百
五十年の遠忌である。今上
天皇がどういう大師号を贈
られるか、今から興味深いと
ころである。

（一九〇二二）は、文明堂總本店の創業
以来、船大工町から馬
町、今町、そして現在の江
戸町と、本店を移すなしか
て、事業が拡大されました。



長崎市江戸町一番一号
文明堂總本店

法人会員紹介

家石橋忍月）、帶谷宗七
(舞鶴座座主)など、當時
活躍していた人物の名前
もある。

「山頭、福屋」とあるのは、長崎隨一の洋食屋とい
われた中小島の福屋である。長崎は坂の町、傘鉢を担
ぎ上げて行くのは、ざ
ぞ難儀なことであつただ
ろう。

番、電話は二番」は、昭和
〇年（一九三五）ごろに發
案されたものでした。
また、文明堂總本店の
本店や各支店に掲げてあ
るのが、楊草仙の書になる
「文明堂」の看板です。
看板には「丁卯八十九
叟 楊草仙」と刻まれて
います。

草仙は、中国の清朝末
期を代表する女流書家、
草書を得意としました。
〇六歳で亡くなるまで、
思想家、慈善家、詩人、医
者としても活躍、度々日
本を訪れるなど、親日家
としても知られました。
この看板は、「丁卯」す
なわち昭和二年（一九二
七）に八九歳の草仙が揮
毫したもので、以来、カス
テラの文明堂總本店の顔
としてお客様をお迎えし
ています。



看板
「文明堂總本店」
(楊草仙書)